

戦後の少女雑誌における「スポーツする少女」の描かれ方と 読者の意識形成に関する研究

—少女の恋愛と運動（練習）との葛藤を中心に—

The study of In the post modern representashion of “Sporting Girls” and the formations of
consciousness in readers of monthly girls magazines:
focsed on conflict caught between love and sports practices of many girls readers of
girls magazines these activities

田中 卓也¹⁾
Takuya TANAKA

概要

「スポーツする少女」は、1960年代より少女マンガという形で誌面に登場した。『アタック No.1』や『サインはV!』では、バレーボールを題材に少女たちに厳しい練習を行わせるとともに、恋や友情など思春期の悩みなどを展開させることになった。オイルショック以降になると、日本は高度成長期を終え、安定成長期へと移行し、多くの国民の関心は個人の多様な価値観を求めようになった。1970年代以降になると、少女マンガはなりをひそめ、ギャグマンガやお笑いブームなどにより衰退化していくことになった。

キーワード：スポーツする少女，スポ根，恋愛，友情，運動

Abstract

In the 1960s, “Sporting girls” were began to appear in monthly girls magazines of cartoon. In “ATACK No.1” and “SAINHA V!”, they played volleyball practice very hard and had a lot of worry about love, friendship.

From oil shock period onwards in Japan, be changing of high industry growing period for stability industrial growing period, the their interests of many Japanese people were searched for personal virtues.

In the 1970s, girls magazines of cartoon were steadily declining.

Keywords: Sporting Girls, “supokon”, love, friendship, sport

1. はじめに

本論文では、戦後とりわけ1960年代以降の少女雑誌を取り上げ、「スポーツする少女」がどのように描かれているのかについて分析、考察を試みるものである。ここで取り扱うものとしては、少女まんがだけでなく、スポーツする少女を主人公に扱ったまんがなども取り扱う。

そもそも「スポーツする少女」は、少女マンガの世界だけでなく、少年雑誌や少年マンガにも登場し、男

¹⁾ 静岡産業大学 経営学部・共栄大学 教育学部（非常勤）

集団の中に交ざるものであった。高校球児を取り上げたマンガには、あだち充『タッチ』や『ナイン』などが有名である。以前女子は参加できない領域であった。また浅倉南のような女子マネージャーにおいても、全国大会でのベンチ入りさえ、1996年より以前には認められなかった。この点で女性にも広くスポーツが親しまれていくようになってきている1970年代の流れが続いている。(堀籠美佳「スポーツする少女にみるジェンダー—1970年代と2000年代のマンガ比較による—」(『東北学院大学教養学部論集』第165号, 2009年)

堀籠美佳は、スポーツする女性に求められるイメージや行動とは何か。またマンガがスポーツをする少女を主人公として描きだすようになった1970年代から30年の間に、スポ根少女マンガというジャンルはどう変わったか、またなぜそのように変化したのか。以上の点に着目しながら、1970年代と2000年代のマンガにおけるスポーツ少女の表象を分析し、比較考察している。

また小石原美保は、論文「1920年—30年代の少女向け雑誌における『スポーツ少女』の表象とジェンダー規範」(『スポーツとジェンダー研究』第12巻, 2014年, 4~10ページ)において、1920年代から30年代の日本における近代スポーツへの女性の参入により、女子スポーツ熱が向上したことを取り上げ、主体となった女性は高等女学校生をはじめとする女子学生であり、表象形成やジェンダー規範について、新たな視座を提示しながら検討を試みている。

執筆者はこれら先行研究で取り扱われていない、第二次世界大戦後の時期に限定し、戦後に発刊されていた少女雑誌を事例にとりあげながら、スポーツする少女がどのように描かれていたのかについて迫るものであるため、先行研究とは視点を異にするものである。

2.1 1945年～1950年代における少女雑誌の諸相

戦後、敗戦後の復興をかかげるものの、人々は生きる目的を失いながらも、光明を見出そうとしていた。政治経済は徐々に動き始めるものの、人々は長い混乱の社会で復興の光明を見出しながら、生きていこうとしていた。続くなかで、わが国の少女雑誌は復刊を果たしたり、新刊雑誌として登場するものが存在した。『女学生』(女学生社, 1946年発刊), 『ひまわり』(ひまわり社, 1947年発刊), 『少女ロマンス』(明々社, 1949年発刊), 『少女』(光文社, 1949年発刊), 『女学世界』(女性ライフ社, 1949年復刊), 『少女ブック』(集英社, 1951年発刊), 『女学生の友』(小学館, 1950年発刊『少女サロン』(偕成社, 1950年発刊), 『少女ライフ』(新生閣, 1951年発刊), 『ジュニアそれいゆ』(ひまわり社, 1953年発刊)などが登場した。ここでは戦後刊行されてから20年近く続いた二誌である『少女ブック』および『女学生の友』をとりあげ、誌面内容についてみていくことにする。

『少女ブック』は、集英社から1951(昭和26)年8月に発刊された。同誌は創刊号より表紙に少女モデルを採用した。また同誌には早い時期から投書欄「仲良しルーム」が存在していた。「仲良しルーム」は少女読者の人気を誇った欄であった。また投書欄には「ブッ子」という愛称で親しまれるキャラクターが登場し、誌面を賑わせた。少女読者らはこぞって「仲良しルーム」に投書を寄せ、仲間を見つけることになった。文通する者もいれば、「少ブ」と略語を使用し、愛読者仲間になる者等も存在した。その後読者間の交流は、誌面外になることが多かった。読者が互いに「少ブ」という略語を合言葉に、目には見えない読者の共同体を形成した。また読者の関心が今まで以上に、多方面に展開した。仲間を求めること以上にスタア、アイドルに熱狂するような傾向が見られた。同誌編集者は誌面では手の届かないスタア・アイドルと文通を通じて交際し、より近い距離での関係を構築することに一役買った。そのため本来の小説、物語を中心であった誌面構成が、テレビの普及等を理由に大きく様変わりすることになった。時代の流行に追随することが目的となった同誌は、「あなたのすてきなスター雑誌」としての方向性をとることになり、少女雑誌からスタア・アイドル誌への誌面方針の転換を余儀なくされた。

また『女学生の友』では、1950(昭和25)年に発刊された少女向け総合雑誌であり、読者対象はおもい中学生、高校生の少女であった。小学館が大正末期から発刊していた学年別学習雑誌から読者を移行させることが企図されていたことは知られているところである。

創刊当初は、吉屋信子の少女小説や村岡花子の翻訳小説などの読み物に、少女マンガ、学習ページはくわえられていた。1960年代以降になると、少女小説やジュニア小説の小冊子が付録として設けられたり、ファッションや芸能記事などが記事の中心に据えられるようになった。1973(昭和48)年からは、別冊付録がファッション雑誌を掲載した小冊子であり、「プチプチ」として人気を得ることになった。1975(昭和50)年からは「JOTOMO」と英語表記に変わり、リニューアルを図るが、売れ行きが伸びず低迷していくことになり、1977(昭和52)年には廃刊となり、のちにファッション雑誌『プチセブン』として生まれ変わるようになった。

2.2 1960年代における少女雑誌の諸相

1960年代になると少女雑誌の誌面内容の多くを「マンガ」が占めるようになっていく。少女小説や少女物語、伝記など戦前期の少女雑誌の人気があった誌面内容のものが、少女たちの個性の多様化などを理由に振るわなくなり、それに変わって登場したのが「マンガ」であった。『りぼん』(集英社、1955年発刊)、『なかよし』(講談社、1955年発刊)、『少女フレンド』(講談社、1963年発刊)、『マーガレット』(集英社、1963年発刊)、『少女コミック』(小学館、1966年発刊)、『ジュニアライフ』(旺文社、1968年発刊)、『女学生コース』(学習研究社、1969年発刊)などが相次いで登場した。

2.3 東京オリンピックの影響と「スポ根」作品の登場

1964(昭和39)年10月10日に「東京オリンピック」が開催された。この開催を契機に日本では様々なスポーツが表舞台に登場するようになった。それは、柔道、ボクシング、野球、テニスなど多くの種目にわたった。またそれに関するマンガも次々と登場した。また『巨人の星』などのように、いわゆる「スポ根」といわれる言葉の発祥となった作品なども多くの少女雑誌で取り上げられた。少女雑誌ではとくに、バレーボールを取り扱った『アタック No.1』と『サインはV』は代表的なものであり、人気を博したマンガであった。また現在でもテレビなどで再放送されることもあり、多くの人々に親しまれることになった。これらの作品はやがてアニメ化、テレビドラマ化と相次いでされることとなり、国民のいるお茶の間を盛り上げた。

3. 『アタック No.1』におけるスポーツする少女

『アタック No.1』は、1960年代以降のバレーボールブームを起こしたスポーツ根性(スポ根)マンガとしても有名であり、『サインはV』と並ぶバレーボールマンガとして知られていた。同作品は、マンガ家の浦野千賀子の作品であり、1968(昭和43)年1月から1970(昭和45)年12月まで集英社刊行の『週刊マーガレット』において連載されていた。またマーガレットコミックスから全12巻が刊行され、少女マンガの単行本として初めて10巻を超えた初めての作品となったといわれる。

なお続編としては、1975(昭和50)年に連載された『新アタック No.1』がある。1969(昭和44)年から1971(昭和46)年まで、フジテレビ系列でテレビアニメが放送された。また、アニメを編集した映画版が1970(昭和45)年から1971(昭和46)年の「東宝チャンピオンまつり」で上映されている。2005年4月からはテレビ朝日系にて上戸彩の主演でテレビドラマ化された。

富士見学園中等部に転校してきた主人公の鮎原こずえが、不良グループの女子仲間を自身で率いながら、バレーボールに幾度も挑戦を繰り返し、次第にこずえの実力が認められて、やがてキャプテンとしてチームに迎えらるることになった。こずえは以後、仲間達との交流を励みにしながら、様々な試練を乗り越え世界を目指すというものである。

主人公の鮎原こずえについて、ここでもう少し説明しておきたい。こずえは、中学2年時に持病であった結核の転地療養で東京の名門校であった明法学園から静岡の富士見学園へと転校を余儀なくされる。バレーは明法学園時代の頃から得意であったこともあり、アタッカーとなっていた。さらに富士見学園転校当初は、

病気のためスポーツは両親から禁止されていた。しかしながら偶然にも桂木率いるバレー部と、落ちこぼれグループを率いて対戦することが決定することになり、交流試合を行うことになった。

こずえは両親に隠れてバレーの練習をしていたが、その練習で結核は全快することになり、バレー部との対戦に勝利することになった。こずえは富士見学園バレー部の主将に就任し、以来青春をバレーに燃やすこととなる。名門進学校の明法学園で首席であったこずえは、たとえ、授業中居眠りをしているも転校後の最初の定期試験で楽々首席となるレベルの人材であった。高校時代、真木村が転校してきたときの中間試験では学年7位であった。性格は少々おっとりしているが、誰にでも優しく人望があった。だが気が強く負けず嫌いなこともあり、ケンカっ早いところも見られ、ときに殴り合いの喧嘩もたえなかったことさえあった。強敵と対峙する際には自信喪失となり、涙を流すこともしばしばであった。努の死やそれに伴うスランプなど、数々の障害と強敵に立ち向かうことになり、中学時代は1度、高校時代は2度に渡り全国優勝を果たした。「富士見学園・中学オールジャパン」のキャプテンを務めるまでになる。高校2年生のときに「実業団オールジャパン」のメンバーに選出され、世界大会に出場し、MVP賞受賞を果たした。彼女の髪型は基本的にポニーテールであるが、ショートやおさげも時には見られた。中学生時代は深緑の瞳であった。高校2年生の頃に瞳は緑色になる。1976(昭和51)年に発表された続編では、これまでとは異なり、丸味のない髪型をしていた。富士見高校でも大沼の後を継いで2年生ながらキャプテンになり、チームをインターハイ優勝へと導くことになった。

『アタック No.1』ではコーチを求める少女たちについて描かれている。高校2年生になった主人公こずえは、部員と共に「春の選抜優勝大会」すなわち「春の高校バレー」で優勝を目指すことになった。監督やコーチがいないながらも、彼女たちは見事この大会で優勝を果たした。その後すぐに運良く、昔のコーチであった本郷先生に、もう一度コーチをしてもらえることになり、彼女たちはたいへん喜んだ。それまでキャプテンでありながら、コーチ兼監督であった大沼は「私も不安だったのよ…全国優勝しながらこのあとをしめていく監督がいないことがね…」(第6巻)と述べている。

また、こずえ自身も「やっぱり監督がいなければなにか不安を感じるわ」(第6巻)と監督の存在を必要としている。彼女たちは全国の高校バレーのトップに立っておきながら、なお監督の存在を求めている。

また『アタック No.1』では、コーチは女に務まらなないと表現している場面が存在する。こずえがコーチの代わりに部員の練習をみることになり、こずえは監督のように部員に対して厳しい特訓を課すことになる。その厳しさに次第にメンバーの不満を募らせ、こずえはチームを追い出されることになる。そこで顧問の本郷は「女子のバレーは女のコーチではつとまらないときいていたが…」とこずえをコーチに選んだことを失敗だったと述懐している。(『アタック No.1』単行本第2巻)なぜ女のコーチは務まらないのであろうか。男の本郷先生が行った時と同じような厳しい特訓をこずえは同じ様にしただけであった。

4. 練習に厳しい本郷俊介コーチの存在

こずえが富士見学園バレー部のキャプテンとなり、強い素晴らしいチームが完成することになった。そのチームのコーチを本郷が引き受けることになった。本郷は、バレーに対しては全くの素人で、大学時代は野球部で活躍したこともあり、バレーとは無関係の存在であった。本郷は自分のスポーツ経験から独自の考え方でこずえ達を指導した。しかしながら富士見学園は、優秀生徒の集まりであったことから、本郷は疑問を抱きながらも、他の先生の「スポーツはただのアクセサリーにしか過ぎない」の一言に目覚め、最強のチームを作ることを決意した。コーチ就任時にはバレー部に問題が起こり、一度は本郷のコーチ辞職といった事件にまで発生した。バレーの知識に関して、全く素人の本郷先生の最初の苦悩の時期を迎えることとなった。そのことはバレー部員たちが「コーチなしでも十分自分たちでやっていける!」と言った自信があったからである。しかし他の中学との練習試合に完敗したことで選手たちが気づいたのはチームワークの大切さ

とコーチの存在であったといえる。やはり指導するコーチがいないとチームはやっていけないことをこずえ達は改めて知ることになった。

やがて本郷は正式にコーチに復帰し、厳格な特訓を再び開始した。彼は、選手思いの優しい性格であったようで、選手一人ひとりに対して時には厳しく、そして隠れた愛情を注いだようである。それに選手たちの得意・不得意な所をよく見ており、苦手分野を克服できるように訓練させていた。このことがこずえ達の眼にも映るようになり、本郷のことを心から信頼した。本郷も選手たちを大切に思い、ますます信頼を厚くさせていった。

5. 鮎原こずえと一ノ瀬努との恋愛と悲劇

こずえら選手は、コーチに信頼を寄せるようになったが、マンガのなかでは、恋愛のシーンもいくつかみられた。こずえには、遠い親戚ともいわれる、同級生の一ノ瀬努がいた。一ノ瀬は高校では新聞部に所属し、こずえとも海辺の砂浜でしばしば面会した。こずえが落ち込んだ時には、彼女の相談役の立場としてこずえを励ました。一ノ瀬もこずえに劣らず、成績が優秀であり、こずえと同じ富士見高校への進学を目指していた。しかしながら、八百屋を経営している一ノ瀬の実父が負傷をしたことで、彼は進学を断念し、父の代わりに家業を継ぐ決心をすることになった。八百屋は経営不振であったため、何とかここで巻き返しをしないと店をたたむことになりかねない、と彼から話を聞いたこずえは、自分が高校進学を諦めて実業団のバレー部に入部すれば、その契約金で一ノ瀬を高校に進学させることが出来るのでは？と大胆な行動に走るようになった。こずえの本心は高校へ行ってもバレーを続けることであった。しかしながら一ノ瀬はその行為に喜びを感じることなく、こずえに高校でも是非バレーを続けて欲しいと強く説得した。彼は進学を断念し、家業を継ぐことになる。ここからこずえと努は別々の道を歩んでいくこととなるが、かつて一ノ瀬に言われた「お互い今の青春を大事にしよう！」という言葉信じ、こずえは高校のバレー部で本格的に動くこととなった。

高校バレー部でも引き続き本郷がコーチとなり、大沼キャプテン率いるチームが誕生した。高校生になって更なるライバルの登場で、こずえの心は困惑し、自信喪失になったことさえあった。しかしながら一ノ瀬は変わらず献身的にこずえを励まし、自信喪失であったこずえを立ち直らせ、大沼キャプテン、みどりらとともに本郷から新技指導を受けた「ダブルアタック」の特訓に励んだ。

「ダブルアタック」とは、本郷自身の考案した技の一つであり、彼女ら3人の呼吸が合わないとできない至難の技であり、3人攻撃性のスパイクで、大沼キャプテンがトス、そしてみどりが左から右への長いスパイク、そしてこずえがそれを更に強打するスパイクのことをいう。

上手くいかず悩むこずえを一ノ瀬は仕事をしながら見守った。一ノ瀬は家業のやり直しを図るには、青空市場が適職と考え、トラックの荷台に新鮮な野菜を運んであちこちのアパートや県営住宅などの大勢集まりそうな所へ商売に回った。仕事で忙しい中でも、こずえの試合を見に来るのであった。準優勝戦でダブルアタックがマスターでき、優勝戦の前日2人は試合が終わったら、富士山への登山の約束を交わした。今まで付き合い合ってきて、お互いに心が通じ合い両想いになれた2人であったが、優勝戦当日に、努は山奥の農家へ野菜を仕入れに出かけた。終了後にこずえの試合を見に行こうとしていたところ、運転中にブレーキが効かず、不運にも谷底へ落ちる事故に遭った。折角優勝したものの、病院へこずえが駆けつけた時には、一ノ瀬は息を引き取っていた。突然の悲しみがこずえを襲ったのである。

6. 『サインはV!』におけるスポーツする少女

さて、上述の『アタック No.1』と人気を二分していた『サインはV!』は、神保史郎・望月あきらのマン

が作品である。『サインはV』はそのマンガの原作とした実写映画もしくはテレビドラマ化されたものである。原作である漫画作品のタイトル表記は『サインはV!』であるが、その他の作品では「!」を省略して『サインはV』の表記が用いられている。先述の『アタック No.1』とともに、1964年の東京オリンピックにおける女子バレーボールのいわゆる「東洋の魔女」の登場から始まった日本のバレーボールブームを巻き起こしたが、本作はもともと「『アタック No.1』への対抗馬が欲しい」という少女フレンド編集部からの要請から企画されたともいわれている。

このため『アタック No.1』がまだ少女マンガ的な路線を残していたのに対し、特訓もあれば魔球もありと『サインはV!』との違いを打ち出している。このためマンガもテレビ放映も両作品の発表時期はほぼ同時であるとのことである。

1969(昭和44)年版のテレビドラマはTBS系でも放送されることになった。「実写スポ根ドラマ」(スポーツ根性ドラマ)の草分け的番組といわれており、当時は大人から子どもに至るまで幅広い年齢層に熱狂的な支持を受けたといわれている。当時の最高視聴率は39.3%に達し、平均視聴率32.3%を誇るほどの大ヒット・ドラマとなった。

内容としては、初年版では、朝丘ユミが主人公であった。彼女は、練習中に姉を亡くしたため、天性の才能を持ちながらもバレーボールを憎み一度は離れようとしていたが、「立木大和」の牧圭介にスカウトされ、再びバレーボールと向き合おうと決意することになる。

なお、「立木大和」は立木製作所の新設バレーボール部だが、厳しい練習のために退部する選手が続出していた。

7. スポーツ少女マンガの愛読者たち—読者の意識形成—

『アタック No.1』や『サインはV!』、『エースをねらえ』などをはじめとする、スポーツ少女をヒロインとしたマンガをこよなく愛読した読者も存在していた。幼少の頃にマンガを購読したAさんは、「私は、マンガを読むことが大好きで、『アタック No.1』、『サインはV!』などは大ファンでした。間違いなくこの2つのマンガを読むことで、バレーボールをはじめましたし、中学校、高校と部活に集中しました。成績優秀で負けず嫌いなこずえにもあこがれましたし、『サインはV!』の朝丘ユミの体を張ったプレイなどすごい。人間業とは思えなかった。どうやってやるの?って、正直思いました。テニスの『エースをねらえ』もよく読んだ。岡ひろみの宗方コーチをただただひたすら信じて、ついていき、素晴らしい名プレイヤーにまで成長するところ。この間まで、バレーボールと思ったら、つぎにはテニスというように、ほんとうにマンガの影響は私にとって大きかった」と述べている¹⁾。スポーツ少女マンガを読むことが大好きであったAさんは、マンガから鮎原こずえや朝丘ユミ、岡ひろみらスポーツ少女へのあこがれを強く抱くようになり、やがてはバレーボール部やテニス部に入部し、ヒロインのように活動に没頭していたことがうかがえる。

当時のAさんのように影響を受けやすい少女は多かったとも思われる。人数は調査していないこともあるため、不明であるが、相当数いたのではないだろうか。

また当時、中学生であったYさんは、「『アタック No.1』の回転レシーブは見事でした。たしか1964年の東京オリンピックのときに東洋の魔女が必殺技にしていたあのレシーブは、練習しましたよ。全然できなくて。でもこずえやみどりらが一丸となって全国大会の決勝でみせるんだから、ほんとすごいよね。良子なんかはどどんくスパイクにも拾っていたんですから。あと時間差攻撃もすごいよ。優秀したときは涙が流れました」というように、『アタック No.1』に関心をもっていたYさんが、マンガ上で登場したさまざまな必殺技について、自らの思いをこめて語っている。Yさんの言葉から、本気で必殺技に臨んでいたことが見てとれる。また選手になりきって、やがては涙まで流していることから、情熱をもちながらひたうむに真剣に取り組んでいたことがわかる²⁾。

さらにKさんによれば、『アタック No.1』や『サインはV!』、『エースをねらえ』は、マンガでも読んでいたけど、どちらかというテレビで見ていたことが印象に残っていますね。彼女たち選手にあこがれ、どれだけ近づこうとマネをしたか……。今思うとまだ10代でしたから、純粋な少女？だったのかもしれませんが。私はでもスポーツ少女たちの恋愛にも関心があったと思います。『アタック No.1』だったら、鮎原こずえさんの彼、えーと……。そう、そうそう、一ノ瀬君だったと思うけど、彼と同じ学校に入って、仲良くしていたもの。県大会かインターハイ？に買って、久しぶりにお休みがあって、そのときには一ノ瀬君に逢いに行ったのよね。でもこずえちゃんの誕生日に彼がなくなるの。彼がこずえちゃんに逢いに来るときに、人を助けようとしたのよ。一ノ瀬君はいい人だった。だからこずえちゃんも惚れていたのね。さすがにどうして？……。って思った。そんな結末だと知らなかったから。

『サインはV!』もそう。ユミちゃんが立木の牧監督が『オレについてこい!』っていうもんだから、ユミちゃんたちはついていくのよ。監督のこと、きっと好きだったのよね。あとジュンちゃんが病気になってしまっただけ、ジュンちゃんの病気がチームがまとまってくことになるのよ。友情ってすばらしわってそう感じた。でも恋愛はつきものね。『エースをねらえ』のひろみちゃん、宗方コーチが好きなのかと思ったら、先輩の藤堂さんも好きなのよね。『どっちよ』って思ったけど。でも恋愛の楽しい時期はすぐに終わっちゃうのよ。コーチがなくなっちゃってね。でも病床のコーチがひろみを励ますのよ。そうするとひろみは立ち上がるの。がんばれちゃうのよ。だって好きな人にいわれるんだから。好きな人に励まされると、女ってほんとう純粋なおトメになってしまう。今思えば、テレビがある日はドキドキしながら早く始まらないかなあって待っていました。そんなおトメでした(笑)」とか語っている³⁾。

スポーツ少女には「恋愛」がつきものであることをKさんは述べている。Kさんは、恋愛にも強い関心があったのか、恋愛シーンについて語っている。「女ってほんとうに純粋なおトメ」という言葉には、Kさんも同情していることが感じ取れよう。しかしながらスポーツ少女の恋愛はすぐ終焉を迎えることについて、Kさんは「恋愛の楽しい時期はすぐ終わっちゃうのよ……。がんばれちゃうのよ。だって好きな人にいわれるんだから」とスポーツ少女たちの恋愛のはかなさを伝えながら、好きな人にいわれると真剣にスポーツに打ち込むことについて力強く訴えるのである。

すなわち『アタック No.1』や『サインはV!』、さらに『エースをねらえ』においては、恋愛もしたいけど、スポーツをこよなく愛し、優勝をめざす、といった恋愛と運動の葛藤のなかで、ひたむきに取り組んだ少女たちを描いていることがうかがえるのではなからうか。恋愛はけっしてうまくいかないけれども、彼女らスポーツ少女たちは、それをバネにしてその後の人生に活かしていることが映し出されている。ここで紹介した3名の女性は、そんな少女時代を過ごしながら、マンガの影響を強く受けてきたのである。また彼女たちだけではなく、全国にこのような少女たちが多く存在していたことが、「スポーツする少女」にあこがれ、そうなりたいと願っていたのである。

8. おわりに—「スポーツする少女」をこよなく愛する読者の意識形成—

『アタック No.1』、『サインはV!』を見てきたが、もう一つスポーツ少女を題材としたマンガ作品として『エースをねらえ!』がある。すこし概要について紹介しておきたい。

『エースをねらえ!』は、山本鈴美香の代表作となるスポーツ少女マンガである。1973(昭和48)年から1975(昭和50)年までの期間と1978(昭和53)年から1980(昭和55)年まで『週刊マーガレット』に連載された。

主人公は女子高校生の岡ひろみである。彼女はテニス部に所属しており、初心者であるにも関わらず、ある日いきなり宗方コーチから選手に抜擢され、猛特訓を強いられる。そのなかで、コーチからの熱心な指導を一身に受けるひろみに対して上級生は反感を抱き、ひろみが慕っていた竜崎麗香(通称「お蝶夫人」)か

らは選手を辞退するように言われるなど、つらいテニス生活が続くことになった。しかしコーチの指導のなかで、ひろみはその頭角を現すことになっていく。その過程には、一つ上の先輩であった藤堂との恋のもどかしさ、慕っていたお蝶夫人との離別などが存在した。やがてひろみは日本代表の一人として大会に出場するまでに成長をする。そんな中、コーチである宗方コーチは若くして病死し、ひろみはその悲しみからスランプに陥る。しかし宗方コーチの友人であり、有望テニスプレーヤーであった桂が彼女の前に現れることになり、新しいひろみのコーチとして彼女を立ち直らせ、ひろみは世界最高峰のウィンブルドン大会への出場権を得る選手にまで成長していくという流れである。物語はひろみとコーチの師弟関係を色濃く描き、そして成長していくひろみの姿を様々な登場人物の視点からも描かれている。

スポーツ少女をヒロインとする少女マンガには、同時期には、美しきフィギュアスケートの世界を描いた、ひだのぶこ『氷上の恋人たち』(小学館, 1974年)や上原きみこ『青春のエチュード』(小学館, 1976年)などが挙げられる。いずれもフィギュアスケートを題材としたスポ根少女が主人公となっている。前者では、もともと不良少年であった剛は、かつて天才と呼ばれたスケーターであり、彼のことをずっと気にかけていた主人公のめぐみは、彼を再びリンクに挙げるために、積極的に働きかけ、やがてはペアを組むまでになった。それはいつしか恋へと変わり、二人で美しいスケートを形作ることになる。また後者では、主人公の沙織が紹介されたペアは、かつて姉を裏切ったことのある大であった。この世界で一番憎むべき相手とペアを組むことになった沙織だが、大に復習してやろうという思いを持ちづづけていたものの、練習を繰り返すことで次第に大への復讐心は消え、いつしか恋心が芽生えるまでになる。70年代のスポーツ少女を題材として取り扱ったマンガでは、恋愛と運動との葛藤のなかで成長を遂げていくという内容に特徴があることがうかがえるのである。

かくしてスポーツする少女は、少女マンガを通じて1960年代以降に花開くことになった。1964年の東京オリンピック開催の影響を受け、女子バレーボールの活躍に人々は目を奪われるようになった。やがてそれは『アタック No.1』や『サインはV!』などの作品を生み出すことになった。そこではスポーツする少女が主人公となり、女子部員メンバーとの交流や葛藤を繰り返しながら、協同意識、絆を深めていくことになった。バレーボールのみならず、「エースをねらえ」のようなテニスの場面でも、「お蝶夫人」にあこがれてテニス部に入部した岡ひろみは、宗方コーチと出会うことで、その後の人生が変わることになった。ひろみは代表選手に選ばれるも、戸惑いを感じながらもコーチを信じついでいった。過酷な練習は続くものの、ひたすらコーチの信頼にこたえようと耐え抜いていく姿が見える。テニスに向き合う姿勢を教えてくれた宗方コーチは突然の病に襲われながら、「エースをねらえ」の一言に覚醒し、さらにテニスの技術を上げることになった。また先輩であった藤堂との恋も経験した彼女は、人間的成長を遂げることになった。

また監督やコーチといわれる男性に影響を受けることも大きく、厳しい練習を通じて恋愛感を生み出すこともしばしばであった。しかしながら、少女はそれを乗り越えて、目標を達成していくというサクセスストーリーがそこには待ち受けている。このような展開を多くの少女読者らは、自分に置き換え、誌面で恋愛をする傾向をもっていた。読者自身も主人公に見立て、厳しい練習指導を受けながらも、監督やコーチに恋心を持つようになったのである。

かくして少女読者は、少女マンガを通じて、スポーツする少女に憧れ、同じような意識を持ちながら成長していくことになった。

注

- 1) Aさんの感想。(2018年11月11日。インタビューは愛知県名古屋市にて)。なお感想については、「スポーツ少女マンガの思い出について」というテーマでそれぞれ3名の方にお話しいただいたものである。
- 2) Yさんの感想。(2018年11月11日。インタビューは京都府京都市の同志社女子大学にて)
- 3) Kさんの感想。(同上)。

引用文献・参考文献

- 1) 中司千裕・神原直幸「野球を題材とした漫画における女性の表象」『順天堂スポーツ健康科学研究』第4巻第1号（通巻63号），2013年，20～25ページ。
- 2) 堀籠美佳「スポーツ少女にみるジェンダー—「1970年代と2000年代のマンガ比較による」『東北学院大学教養学部論集』第165巻，2013年，140～145ページ。
- 3) 小石原美保「1920年—30年代の少女向け雑誌における『スポーツ少女』の表象とジェンダー規範」『スポーツとジェンダー研究』第12巻，2014年，4～10ページ。
- 4) 小石原美保「1920年—30年代の少女向け雑誌における女性スポーツ選手をめぐる言説の検討—競技会報道と運動美談にみるスポーツ・ヒロインのナラティブ」．同上第13巻，2015年，12～18ページ。
- 5) 押山美和子「浦野千賀子『アタック No.1』にみる身体表象—スポーツと女性身体の関係性—」『専修国文』（第96巻，19～23ページ，2015年）。
- 6) 押山美和子「六〇年代から七〇年代のスポーツ少女マンガにみるヒロイン像」日本スポーツとジェンダー学会第15回記念大会，2016年。
- 7) 中川裕美「『少女の友』と『少女倶楽部』における編集方針の変遷」日本出版学会／出版教育所共編『日本出版資料』第9号，2004年。
- 8) 今田絵理香『少女の社会史』勁草書房，2007年。
- 9) 渡部周子『〈少女〉像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』新泉社，2007年。
- 10) 田中卓也「『少女ブック』における読者意識の形成に関する研究」『共栄大学研究論集』第13号，2014年。
- 11) 田中卓也「少女雑誌『女学生の友』および『プチセブン』における読者意識の形成」全国地方教育史学会第38回大会（於：名古屋大学）発表レジュメ，2016年。
- 12) 川村邦光『オトメの祈り』紀伊国屋書店，1993年。
- 13) オフィスJB『完全保存版 大好きだった！少女マンガ 70年代編』双葉社，2014年。
- 14) 『このマンガがすごい！』編集部『大人の少女マンガ手帖 熱血！ スポ根ヒロイン コノマンガがすごい』宝島社，2018年5月。



【写真1】「アタック No.1」



【写真2】『サインはV!』単行本表紙



【写真3】『エースをねらえ!』単行本表紙

